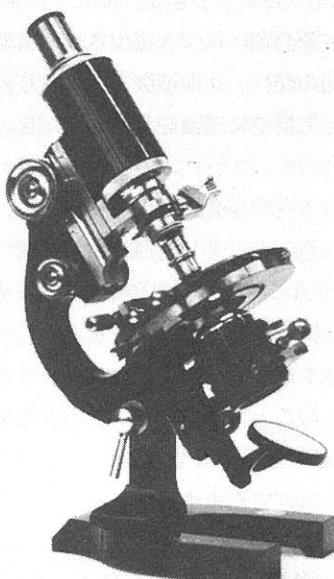


# 北海道支部会報

日本細菌学会北海道支部



1922年製造 Ernst Leitz  
1922年北海道大学医学部細菌学講座開講と同時に購入された最初の顕微鏡 (BAK NO.1)

## 一 目 次 一

卷頭言	皆川知紀	2
寄稿「ザンビアの衛生事情」	佐藤儀平	3
寄稿「第5回ライデン・カンファレンスに出席して」	中根明夫	5
研究「齧歫原生細菌についての最近の研究」	脇坂仁美	6
支部活動		
学術集会		8
評議員会・幹事会		9
平成3年度会計報告		10
支部役員名簿		11
編集後記		11

[巻頭言]

## 北海道支部会報発刊に当たって

支部長 皆川 知紀

支部の活性化を請われて、無謀にも支部長を引き受け早くも1年を経過しました。前支部長よりの懸案であった支部会則の改訂を行い、新会則に基づき選出された新幹事、新評議員とともに支部活動が開始されました。会費の改正、会報の発行、北海道医学大会よりの脱会、贊助会員の募集、総会、集談会のあり方の検討などにつきまして慎重に議論をしていただき、私自身も大いに認識を改めるところがありました。

また細菌学会総会の折りに開かれる支部長会議に出席しまして、全国各支部においても同じような悩みを持ち、それを克服するために色々と工夫しているお話を伺いました。

例えば、関東支部では、会報発行と年2回の学術集会を担当する会頭のアイディアによって集会の持ち会を自由に変えることによってマンネリ化を防いでいることです。関西支部では、隔年に中部支部と合同学術集会を開催し、親睦を深めつつ刺激し合っていることです。九州支部ではウイルス支部との合同集会を考えていることです。年に一度の支部長会議は、北海道支部の活動を反省し、また一方で支部の存在を appeal する重要な会議であることを知りました。

これまでに実行してきました点を挙げてみると、

- ① 年会費を500円から1,000円に改正し、また贊助会員の募集（まだ行っていない）によって得られた収入増によって講師謝礼の増額、遠距離（帯広、旭川、函館など）より来られる幹事、評議員の先生への旅費の支払を行うようにしました。
- ② 支部総会は、北海道医学大会の分科会として、小さな抄録集をもとに催されてきました。“本部学術集会の抄録集は薄い方がよいが、支部総会の抄録集は丁寧であるべき”との方針で医学会から脱会し、独自の抄録集を作製し総会を持ちました。これからも自由な発想に基づく総会が工夫され発展することを願っております。
- ③ 集談会はシンポジウム形成にして複数の講師によって構成され、テーマも病原細菌学に限らず、地球規模の微生物生態系について学ぶという北海道らしいものにするように心掛けました。

中野益男先生（帯広畜大、生物資源化学）には、糞石と古代人の食生活、環境汚染と古細菌、抗生物質飼料に代わるべき微生物飼料などのお話をいただきましたが、これまでの思考の180度転換を迫られるお話にショックを受けました。

木村喬久先生（北大、水産学部、微生物学）には、魚病の原因微生物を次々に発見され、全く知られていなかっただけの微生物の分類をDNAホモロジーによって行っているお話、養殖魚の抗生物質飼料による抗生物質汚染などについてやはり地球環境汚染と密接に関連する講演をいただきました。

山本友子先生（杏林大、医学部、微生物）には、全ての生物に共通して発現される熱ショック蛋白（HSP）について、特に先生の専門の *Yersinia* 菌の HSP の生理学的意義について、さらに自己免疫疾患と HSP との関連性について興味深いお考えを披露していただきました。今や HSP を無視して生物現

象は語れない時代となっています。

鈴木康弘先生（慈恵医大、寄生虫学）には、動物、ヒトで慢性感染しているトキソプラズマがエイズなどの免疫不全状態になると休眠状態から脱し、増殖することによってトキソプラズマ症になるメカニズムを明確に示していただきました。一方的にトキソプラズマが休眠しているのではなく生体防御因子の中でもインターフェロン- $\gamma$  (IFN- $\gamma$ )とのせめぎ合いによって平衡が保たれているというのです。マウスエイズ (MAIDS) ウィルス感染による免疫不全状態によって悪化するトキソプラズマ症をマウス IFN- $\gamma$  投与によって治療した成績を披露していただきました。

今後の集談会では、「ライム病」、「エキノコックス症」、「好中球機能不全と易感染性」などについてお話しやすく予定になっております。細菌のみならずウィルスから寄生虫までの広い範囲の寄生体と宿主との間の相互関係に主眼を置いた物の見方から、改めて抗生物質に頼らない細菌感染症を克服する手段を探っていくという process が現在要求されています。MRSA で示されますように抗生物質汚染からいかに脱却できるかが、次なる課題であります。

「井の中の蛙」から抜け出し、広い地域で広い領域と手を取り合って進むのが北海道らしい支部のあり方のように信じます。会員の皆様のご理解と情熱的でしかも人間性あふれる数々の創造的研究によって支部が一層活性化されますことを祈念いたしまして支部長の挨拶といたします。

(平成4年4月)

## [寄 稿]

### ザンビアの衛生事情

ザンビア大学獣医学部 佐 藤 儀 平

3年1ヵ月間のザンビア大学獣医学部技術協力プロジェクトでの専門家活動もそろそろ終わろうとしています。こちらの大学では獣医公衆衛生学を担当しているのですが、主に新聞に出た疾病情報を参考して当地の2・3の細菌性伝染病についてふれてみたいと思います。

まず、この国ではよく人が死にます。ザンビアでは、人が亡くなると弔いのため沢山の人が集まりますが、そのため仕事を休むことが多いです。私は東北地方の田舎で昭和初期から10年代半ばまで少年時代を過してきましたが、丁度その頃の日本とよく似ています。1980年代半ばと思いますが、平均寿命が日本では男子73才、女子78才の年度にザンビアでは男47、女50才となっています。小児の死亡率が高い上に、この地域特有のマラリアが加わりますから、数十年前の日本よりさらに条件が悪いかもしれません。

まず、結核ですが、ザンビアでは成人死亡原因中13%は結核、12%が心臓病、7%はマラリア、外傷、肺炎など、5%が周産期疾患となっています。ザンビア人口の60%は結核に感染しているが、通常は発病者は限られていた。これが1980~84年までの状況だった。ところが1986年の結核死亡7,000人に対し、1990年には、17,000人となり流行の様相を示して來た。この増加原因は主にHIVの混合感染によるものです。結核患者の70%はHIV陽性とされている。特に従来は結核は老人と若年層に多かったのが、現在は17~45才の青壮年層に多くなったと言われる。アフリカのこの地域は AIDS の多

いことで知られているが、長い間の性慣習と関連しているのでむずかしい問題である。

さて、人は牛結核菌に感染するが、ザンビアの結核患者のうち何%が牛結核に原因しているかは明らかにされていない。ザンビア9州のうち西部州は牛の飼育地帯ですが、昨年抗酸菌関係のセミナーがあったが、特にこの州に結核が多いとの報告がみられた。と畜検査では時々結核牛が見出されるので牛に本病の多いことはうなづけます。

牛乳は一部は殺菌されて売られていますが、特に郡部では保存のため、酸乳化して（サワーミルク）飲用する習慣になっています。サワーミルクになって、なお乳汁中の結核菌が生残しているかどうかは明らかでありません。調べて見る価値はあるでしょう。この国の家畜は主に traditional farm (伝統農場) が支えていて、牛も 290 万頭（乳肉共）のうち 260 万は衛生管理の悪い昔ながらの放牧にたっています。都市に出荷される牛乳を生産する commercial farm (商業農場) を除いては、先進国で法律で実施している牛の結核検診や感染牛の淘汰などはやられていないので、牛結核が人に感染する可能性は否定出来ないように思えます。

次にザンビアでは家畜や野生動物の炭疽が多い。私の前任者の清水亀平次教授は在任中に国立公園に発生したカバの炭疽の調査をされました。この地域は雨期には豪雨がくり返されるので、炭疽芽胞の汚染拡散があるでしょう。前出の西部州では 1990 年 11 月から今年 2 月にかけて 11 万頭の牛と 68 人が炭疽で死んだとされています。もちろんザンビアでも満足ではないにしてもワクチン接種や炭疽病牛・死亡牛の廃棄処置にはしかるべき法律が適用されることになっているのですが、病牛や死亡牛の肉を摂取して人の感染が発生している様です。と畜検査は比較的きびしくやられているので、市販の肉から炭疽になることはないと思います。人の炭疽は密殺肉、病牛・死亡牛の肉によるものです。もちろん、これらの牛を解体中に感染することもあるでしょう。この様な炭疽牛からの人の感染は教科書では未開発国やタン白源の不足する地域で発生すると書かれています。しかし、この点では我々も笑っていられないと思います。同じことは日本でもおきています。特に 1965 年岩手県で、100 人以上の重・軽症炭疽が病牛肉を食べ発生しています。しかし日本の場合は死者はありませんでした。何故ザンビアでは炭疽による死者が多いのでしょうか。前に述べた traditional farm では所有家畜の売買はごく限られた時（冠婚葬祭など）にしかなされません。牛を売ってその金を病気予防の衛生費にするなど再生産に使うことはしません。ですから traditional farm の牛のうち、市場に出荷されるのはごく一部になります。この慣習はザンビアの畜産物の流通や増産、家畜衛生推進の妨げとなっています。牛の数は財産の多寡、地位の象徴として重視され、葬式、成人式、雨乞いなどの重要行事を除いては滅多に牛を殺してたべることはしない。いきおい、たべるのは病牛や死亡牛と言うことになります。これらは必要タン白源です。ザンビアでは病死牛をたべることには必要性があります。この様に社会の慣習が根本的にちがうことがザンビア人に炭疽が多い原因です。さらに、病院の整備不足、抗生物質の欠乏が死者を多くしています。前記の岩手県の例では幸い抗生物質が効いて死亡はありませんでした。的確な診断治療が可能な日本とのちがいです。いくつかの国がザンビアの畜産開発に技術協力をしていますが、永年の慣習をかえなければならないので、目的達成には何世代もかかるでしょう。

最後にコレラですが、コレラは現在世界的に発生が多くなっています。記録ではザンビアのコレラの初発は 1978 年とされています。ザンビアはハカ国と国境を接する内陸国ですが、これまで北部のタンザニアとかザイールではコレラは常在していて、これらと国境を接している湖沼や低湿地地方で

散発していたことは間違いない。ところが、この2・3年は内部にひろがりルサカなどの都市に発生していて、昨年よりさらにふえて、今年1月から3月までに数千人が罹患し855人が死んだと言います。アフリカではどこでも人口の都市集中が進んでいますが、ザンビアでも地方から出て来た人々はコンパウンドとよばれる半ばスラム化した集団居住区に多く住んでいます。こうした地区に患者が多いのです。私共外国人や経済的にめぐまれたザンビア人が住む上下水道のととのった地区では問題はありません。清潔な環境と安全な飲料水のある所にはコレラは発生しないのは常識ですが、新聞には、1964年のザンビア独立までは官庁による指導が徹底し、水についても問題なかったが、独立後の人口の都市集中に対する政府の無策によって、こうした事態になったと政府攻撃の論調もみられます。前記のコンパウンドではトイレは不完全で、排泄物処理については無関心です。さらに特有の自然現象が拍車をかけます。こちらでは雨期（概ね11～4月）は毎日の様に日本で言う集中豪雨的な夕立があります。時にはひと晩中続きます。一面水浸しとなるので、当然排泄物は流れで環境を汚すことになります。そして飲水が汚染され、コレラの発生につながると言う図式になります。ルサカ市内のいくつかのコンパウンドのうち水道の入っている所はコレラは少ないと言うことです。以前のある統計では、ある地区の患者の10%は河川水、55.3%は小川や井戸水をのんでいたとのことで、都市部でもテレビでは雨の後の溜り水を汲んでいる人の姿が写ります。都市部の普通教育の学校とて同じ条件なので、流行時にはよく学校は閉鎖されます。衛生教育のレベルの低さはもちろんですが、金をかけて環境を整備する努力が不足しています。コレラが政治問題化したので、大統領みずからコンパウンドの清掃などを見せて大々的なコレラキャンペーンもしていますが、道端のゴミを清掃した位でコレラはなくならないでしょう。先にのべた様に、ザンビアでのコレラは雨期に発生していましたが、昨年頃からは乾期に入ってからも都市部で発生しています。コレラ菌の汚染が定着したかとも思えます。また、医療施設の不備、消毒薬・治療薬などの欠乏のため死者も出ることになります。天候と言う自然現象はどうにもならないので、国家経済が改善され、根本的には都市の衛生環境が整備されない限りこの国からコレラは消えることはないでしょう（1991・6・28）。

## 「寄 稿」

### 第5回ライデン・カンファレンスに出席して

北海道大学医学部細菌学教室 中 根 明 夫

1990年10月の或る日、マクロファージ研究の分野では第一人者のオランダのvan Furth博士から手紙がきた。1991年オランダのNoordwijk aan Zeeと言うところでFifth Leiden Conference on Mononuclear Phagocytesと言う会議を開催するから発表しないかと言う誘いの内容であった。Fifth Leiden…とは一体何のことかと思いつつ、そこにエントリーされている名前を見ると、免疫学、特にマクロファージ、細菌感染免疫の分野では第一線で活躍している錚々たる面々であった。実はこの会議は、van Furth博士が主催し、1972年より不定期に開催されているクローズドの有名な会議であることを知ったのは、会議に参加してからであった。今回は、1984年以来、7年振りのことである。日本から呼ばれたのは、van Furth博士の所に留学していた産業医科大学微生物学教室の吉田真一先

生と私の二人であった。

1991年5月10日、吉田先生と成田空港で落ち合い、KLMでオランダへ。12時間余りでアムステルダム・スキポール空港へ到着した。気候は、札幌より弱冠寒い感じで、日本と異なり時間がゆっくりと過ぎていくような雰囲気であった。会議は5月13日より4日間行われた。参加人数は100人余り、会場はライデンより車で30分の海岸沿いのNordwijk aan Zeeにあるホテル・デ・パークで、全員が泊まり込みで行われた。会議は朝8時30分から、夕方6時頃までで、昼食やコーヒーブレイクを除き、びっしり行われた。さらに、3食すべて全員が集まって取り、その間も研究の話が中心となり、まるで合宿のようであった。

活性化マクロファージ研究の大御所のCohn博士、モノカイン研究のOppenheim博士、コロニー刺激因子(CSF)のStanley博士、癌のサイトカインによる治療のKaplan博士など、オランダ、イギリス、イタリア、オーストリア、スイス、スウェーデン、ドイツ、ハンガリー、フランス、ベルギー、旧ソ連、アメリカ、オーストラリア、イスラエル、そして日本から集まり、いずれも一流雑誌の論文でしばしばお目にかかる研究者達であった。会議のテーマとしては、マクロファージの機能を、細胞間相互作用、リセプターとシグナル伝達、サイトカイン産生、感染防御などで、遺伝子レベル、細胞レベル、生体レベルの研究を網羅しており、現在のマクロファージ研究の進展ぶりを目の当たりにすることことができた。私の行っているリストリア研究の方でも、ドイツのHahn博士、Mielke博士、アメリカのCzuprynski博士、Portnoy博士と、いずれも初対面であるが、普段、論文でお目に掛かっているせいか、旧知のような感じがして話が弾んだ。また、研究内容はもとより、研究発表の態度、討論には学ぶところが多かった。私などは、発表のときはスライドの方に向きっぱなしであるが、彼等は、聴衆のほうを向き、自分の研究をより強くアピールするのに懸命であった。夜になると、発表練習をする声をしばしば耳にした。また、討論も極めて活発で、マイクの前にすぐ列ができるほどであった。私も質問をしようと文章を考えているうちに、列に並び損ねることがほとんどであった。

会議の最終日の夜、オランダの政治上の首都であるデン・ハーグにあるホテル・ディンディーズでディナーが催された。このホテルはデン・ハーグで最も格式が高く、各国の首相級の人が泊まる所だそうだ、夜の12時過ぎまで、夢のようなひとときを過ごした。

会議の前後、van Furth博士の研究室で私と同系統の仕事をしているLangermans博士が、アムステルダムのアンネ・フランクの家、ゴッホ美術館、ロッテルダムの動物園、デン・ハーグ近郊のマドローダム、ユトレヒトを案内してくれた。また、ライデンの風車、キューケンホフ公園のチューリップも、とても美しかった。たくさんの素晴らしい思い出を抱えて5月20日に札幌に戻ってきた。

## 「研 究」

### 齲歯原生細菌についての最近の研究

東日本学園大学歯学部口腔衛生学講座 脇 坂 仁 美

ヒト口腔内の常在微生物叢は300種以上の菌種からなるといわれており、それぞれの菌種は口腔内で歯面、粘膜面、歯肉溝（歯とその周りの歯肉の間の溝）といった各部位で適在適所の“すみわけ”を

していると考えられている。そして、齲歯（虫歯）と歯周疾患（歯槽膿漏）の発症・進行に前後して、ある種の細菌が齲歯発症歯面部や、あるいは歯周疾患に罹患した歯肉溝内から高頻度で分離されてくることが知られている。

このうち、齲歯誘発性との関連性が報告してきた細菌種には *Streptococcus mutans* などの口腔レンサ球菌、*Lactobacillus*、*Actinomyces* などがあるが、その中でも最も齲歯との関連性が注目されているのは *Streptococcus mutans* (*Strep. mutans*) である。本菌は 1924 年に英國の J. K. Clark がヒトの齲歯の活動性病巣から分離し、ヒトの齲歯の病原菌として記載したことにはじまる。*Strep. mutans* はその後長い間見過ごされていたが、1970 年代に入って齲歯の病因論に関する細菌学的研究がさかんに行なわれるにつれて本格的に注目されることになった。そして本菌に対する研究が進むにつれて、a から h までの血清型が存在すること、そしてさらに性状の違いから *Strep. cricetus* (血清型 a)、*Strep. rattus* (b)、*Strep. mutans* (c / e / f)、*Strep. ferus* (c)、*Strep. sobrinus* (d / g)、*Strep. downei* (h) の 6 種の菌種に分類された。そして、現在ではこれら 6 種をひとまとめにミュータンスレンサ球菌 (*mutans streptococci*) と呼んでいる。ミュータンスレンサ球菌は動物種によって分類されてくる菌種に差異がみられ、ヒト口腔内からはこの 6 種のうち *Strep. mutans* (c / e / f) と *Strep. sobrinus* (d / g) が主に分離されている。

この *Strep. mutans* と *Strep. sobrinus* を比較すると、DNA の塩基組成 (GC 含量) や生化学的性状などが大きく違っていることが明らかとなった。この点から、1985 年 9 月米国・バーミングハムで開催されたミュータンスレンサ球菌のコンファランスの閉会講演で Gibbons 博士は血清型 d、g 群の *Strep. sobrinus* と c、e、f 群の *Strep. mutans* をはっきり区別することが齲歯の研究の発展に極めて重要であると強調した。その後、*Strep. mutans* と *Strep. sobrinus* について、特に齲歯誘発性に関連したビルレンス因子について、これら 2 種の菌を比較する研究が盛んにおこなわれた。in vitro の研究において、*Strep. sobrinus* は pH 6.0 以下の酸性状態でもグルコースを発酵して酸を生成しつづけ、*Strep. sobrinus* の酸産生量は *Strep. mutans* より有意に高いことが報告された。また、顎下腺由来のムチン画分は *Strep. mutans* のハイドロキシアパタイト (歯の主要な成分) への付着に関与していることが示されたが、*Strep. sobrinus* の付着は唾液線由来のムチン画分に全く影響を受けることなく、スクロースを基質として本菌が産生するグルコシルトランスフェラーゼ (GTF) によって生成されるグルカンによって歯面に付着することが実験的に証明された。さらに、動物実験においても、*Strep. sobrinus* はラットにおいて高い齲歯誘発能、特に歯の平滑面齲歯に関与していることが示唆された。このような in vitro や動物実験の結果から、*Strep. mutans* のみならず *Strep. sobrinus* を齲歯原生細菌としてもっと注目すべきであるとの研究報告が最近多く認められる。

ところで、何故最近までこの *Strep. sobrinus* が看過されてきたかであるが、その理由の一つとして、分離、培養に適する優れた選択培地の開発の遅れや、従来の煩雑な細菌培養法にかわる新しい細菌同定法の導入が遅れていることがあると思われる。

ヒトの口腔内のミュータンスレンサ球菌の分離、培養には、1973 年に Gold らの考案した *Mitis-salivarius Sucrose Bacitracin* (MSB) 培地がミュータンスレンサ球菌の選択培地として最も汎用されてきた。この MSB 培地を用いた研究報告は数多くみられるが、これらによるとヒト口腔内から分離されるミュータンスレンサ球菌のほぼ 90 % が *Strep. mutans* で、*Strep. sobrinus* はその他のわずかであった。しかし、近年 MSB 培地の選択性が疑問視され、新しいミュータンスレンサ球菌の選択培

地の研究が進められている。van Palenste in - Helderman らはミュータンスレンサ球菌の新しい選択培地として Trypticase Yeast - Extract Cystine Sucrose Bacitracin (TYCSB) 培地を報告している。この TYCSB 培地は、その後、他の複数の研究グループによって、従来から汎用されていた MSB 培地と比較検討された。その結果、MSB 培地ではミュータンスレンサ球菌のすべての株の分離に適当ではなく、特に *d / g* の *Strep. sobrinus* の発育阻止が認められたのに対して、TYCSB 培地ではこのような菌株による発育阻止傾向は認められなかったことが報告され、TYCSB 培地がミュータンスレンサ球菌の選択培地としてより優れていることが示された。著者らはこの TYCSB 培地を用いて、小児の唾液中の *Step. sobrinus* と齲歫発症との関連性について調査した結果、唾液中から *Strep. sobrinus* が多く分離される小児では、本菌が分離されない小児に比べて、有意に高い齲歫歯、齲歫歯面数の増加を認めた。さらに、高い GTF 活性を有する *Strep. sobrinus* が分離される小児では、特に平滑面齲歫の増加が著明であった。

最後に、これら齲歫原生細菌の感染経路についてであるが、ミュータンスレンサ球菌は新生児の口腔内からは殆ど分離されていない。そして、小児期に歯の萌出や齲歫の発症に前後してヒトの口腔内より分離されてくるようになり、高齢者になると歯の喪失に従って本菌の分離率が低下する。このように、歯の萌出に従って口腔内から分離される *Strep. mutans* や *Strep. sobrinus* はどのような経路で感染しているのか、著者らは家族内伝播の可能性について家族員から分離される本菌の血清型と生化学的性状の相同性から調査した。その結果、小児の口腔内から分離した *Strep. mutans* や *Strep. sobrinus* の血清型はゲル内沈降反応からみて、その母親から分離した *Strep. mutans* や *Strep. sobrinus* と同一であること、さらに生化学的性状からみても極めて類似していることから、本菌の母子間での伝播の可能性を示した。

このように、齲歫の原因において従来から注目されていた *Strep. mutans* と、さらに最近 *Strep. sobrinus* がその性状、分離頻度、あるいは齲歫発症部位などとの関連性から重要な菌種であると考えられている。そして、この *Strep. mutans* と *Strep. sobrinus* は小児期に家族内、特に母子間で伝播している可能性が極めて強いことから、今後新しい齲歫予防活動や口腔衛生活動を導入していく必要があると思われる。

### [ 支 部 活 動 ]

平成3年度日本細菌学会北海道支部学術集会

平成3年2月27日 第126回集談会

「魚類細菌性疾病的最近の話題」

木 村 喬 久 先生（北海道大学水産学部）

平成3年4月26日 第127回集談会

「微生物飼料と現状と展望」

中 野 益 男 先生（帯広畜産大学）

- 平成3年6月19日 第128回集談会  
「熱ショックタンパク質の生理的機能」  
山本友子先生(杏林大学医学部)
- 平成3年10月4日 第129回集談会(北海道腸内細菌叢研究会主催)  
「細菌による腸管感染症の問題点と対策」  
三輪谷俊夫(大阪府立公衆衛生研究所)
- 平成3年11月15日 第59回 日本細菌学会北海道支部学術総会

平成3年度評議員会・幹事会

平成3年2月27日評議員会

議題

- 1) 平成2年度行事報告・会計報告
- 2) 平成3年度行事予定・予算案
- 3) 支部長・評議員・幹事の交代
- 4) 日本細菌学会北海道支部会則の改則

平成3年4月26日幹事会

議題

- 1) 北海道医学大会への不参加
- 2) 会報の発行
- 3) 賛助会員の募集

平成3年6月19日評議員・幹事合同会議

議題

- 1) 北海道医学大会への不参加
- 2) 賛助会員の募集
- 3) 会報の発行
- 4) 他支部との交流
- 5) 日本細菌学会名誉会員の推薦

平成3年10月4日幹事会

議題

- 1) 第59回日本細菌学会北海道支部学術総会のプログラム編成

平成3年11月15日評議員・幹事合同会議

議題

- 1) 平成3年度行事報告・決算報告(途中経過)
- 2) 平成4年度行事予定・予算案

[日本細菌学会北海道支部平成3年度役員名簿]

支 部 長	皆 川 知 紀 (北大・医・細菌)	
庶 務 中	根 明 夫 (北大・医・細菌)	
会 計 浅	野 美佐子 (北大・医・細菌)	
評 議 員 相 川 孝 史 (道立衛生研究所)	東 匠 伸 (旭医大・細菌)	
井 上 勝 弘 (東京農業大)	小 熊 恵 二 (札幌医大・微生物)	
木 村 喬 久 (北大・水産・微生物)	熊 谷 満 (道立衛生研究所)	
後 藤 一 一 (石狩家畜保健衛生所)	斎 藤 玲 (北大・医療短大)	
佐 藤 儀 平 (帯広畜産大)	品 川 森 一 (帯広畜産大・公衆衛生)	
清 水 亀平次 (帯広畜産大)	白 帰 敏 一 (帯広畜産大・微生物)	
砂 川 紘 之 (道立衛生研究所)	波 岡 茂 郎 (北大・獣医・実験動物)	
橋 本 信 夫 (北大・獣医・公衆衛生)	馬 場 久 衛 (東日本学園大・歯)	
平 棟 孝 志 (酪農学園大・獣医)	前 川 静 枝 (札幌医大・微生物)	
松 宮 英 視 (天使短大)	宮 川 栄 一 (酪農学園大・酪農)	
森 洋 樹 (東日本学園大・薬)	梁 川 良 (酪農学園大・獣医)	
吉 岡 一 (旭川医大)	渡 辺 繼 男 (北大・歯・細菌)	
幹 事 磯 貝 恵美子 (東日本学園大・歯)	小 野 悅 郎 (北大・獣医・衛生)	
鎌 口 有 秀 (東日本学園大・歯)	菊 池 裕 子 (北大・歯・細菌)	
木 村 卓 郎 (北大・免研・血清)	小 華 和 杓 志 (北大・医・細菌)	
小 林 弘 幸 (北海道薬科大・微生物)	武 士 甲 一 (道立衛生研究所)	
中 島 靖 之 (家畜衛生試験場)	藤 田 晃 三 (旭川医大・小児)	
横 沢 紀 子 (札幌医大・微生物)		
会 計 監 事 松 宮 英 視 (天使短大)	大 沼 裕 (石狩家畜保健衛生所)	

[編集後記]

支部会報第一号をお届け致します。予定より発行が大幅に遅れましたこと、お詫び申しあげます。今回、快く玉稿を頂いた佐藤儀平先生、脇坂仁美先生に厚く御礼申し上げます。

現代社会が一月と言えず急激に変動していると同様に、研究の世界も次々と新しい研究が発表され、それをフォローするだけでも大変な労力を要する現在です。最新のトピックスに乗れない(あるいは乗らない)研究者は相手にされないような雰囲気さえあるように感じます。しかし、その様な時代であるからこそ、私共は、時流に流されず、地にしっかりと足を着け、自分の研究を自信をもってすべきと思います。また、個人研究も重要ではありますが、研究の効率を考えると、各研究者の得意分野を生かしたプロジェクト研究も積極的に行い、 $1+1=2$ ではなく、 $1+1=3, 4, 5, \dots$ にすることも必要だと思います。その意味でも、支部会報を研究交流の場として大いに利用して頂き、号を重ねるごとに、北海道における研究が加速度的に発展することを願っております。

(平成4年4月、中根記)

# 飯田 廣夫 先生 御逝去のお知らせ

日本細菌学会 名誉会員 飯田 廣夫 先生は、平成4年5月2日午前1時18分、呼吸不全のため北海道大学医学部附属病院において逝去されました。

先生は、ボツリヌス中毒に関する御研究を始めとした数々の御業績により、北海道新聞文化賞、小島三郎賞、北海道医師会賞を授与されました。先生は、日本細菌学会理事として長年に渡り学会の発展に寄与され、また、第59回日本細菌学会総会会長を務められました。先生は、日本細菌学会北海道支部長も2度務められ、北海道支部の発展のために御尽力されました。

北海道大学を御退官後も北海道大学名誉教授となられ、御活躍が期待されていましたが、高血圧症などで北大病院へ度々の入院を余儀なくされました。病床にあっても先生の健筆は衰えることなく、ボツリヌス中毒に関する総説、随筆を寄稿され、また大好きな読書を欠かすことのない毎日をご過ごしていましたが、本年4月末以来肺炎の悪化による呼吸不全のために亡くなられました。

先生の御生前の功績を偲び、日本細菌学会北海道支部を代表してここに謹んで哀悼の意を表します。

平成4年5月15日

日本細菌学会北海道支部長

皆川 知紀